３Ｈ美術教育における
表現・コミュニケーション力の育成

― 現代陶芸作品の鑑賞授業を通して ―

三 桝 正 典 ・ 若 元 澄 男* ・ 一鍬田 徹*

Development of Ability of Self-expression and Communication Ability in 3-H Art Education

— Based on the Appreciation Activity of the Present Ceramic Art Work —

Masanori MIMASU, Sumio WAKAMOTO and Toru HITOKUWADA

Abstract. This study tried to prove the validity of "3-H (Heart, Head, and Hand) art education" focusing on "Head"and "Hand" founded on "Heart". This study examined the cultivation of the "ability of self-expression and communication" on the basic idea of "3-H art education".

Three appreciation activities were set; the present ceramic art work, a Sketching activity, and a Communication activity with the arts. Based on a post-activity evaluation, the activation of "Hearts" draws "Head" and triggers "Hand".

Key words: "3-H art education" "ability of self-expression and communication" "the appreciation activity of the present ceramic art work"

Ⅰ．はじめに

21 世紀を迎えた今日の生徒を取り巻く社会は，国際化・情報化の流れが目まぐるしく日々変化している状況を見せている。その中で，生徒に求められている「生きる力」は，その時代の早い流れを乗り切ることが出来る「力」であり，それを育てることが，「美術教育」においても教科として強く求められている。その育てる力の一つとして「表現・コミュニケーション力」があげられる。この力は，本校の設定しためざすべき人間像「自分を見失わずに異なる文化や異なる価値観を受容し，情報を活用しながら他者とのコミュニケーションを積極的に展開でき，よりよい意思決定を目指し行動しようとする人間像」においても最も重要な力として共通確認され，平成 15 年度よりその研究が開始された。

美術科では，学習指導要領においてその内容が「表現」と「鑑賞」に分けられている。特に重視が主張されている「鑑賞」の目標には美術作品のよさや美しさを主体的に「見る」こと「語る」ことができるようにすることがあげられるが，このことは，まさに「コミュニケーション力」に通じるものである。また，美術活動においても描くこと，作ること，見ること，そして語ることが不可欠に結びついているのである。

＊広島大学大学院教育学研究科

そして「表現」は個人とその環境や相手とのつながりをもとうとする意欲，伝えようとするコミュニケーション意欲から発せられているものである。「表現」には作品をみてワクワクドキドキする意欲や相手とコミュニケーションしたいという欲求がふくまれるのである。「表現・コミュニケーション力」の育成をはかることは，まさに「表現」と「鑑賞」さらには評価とが一体になった美術活動そのものの基本に立ち戻ることではなかろうかと考える。

本研究は，若元が提唱する「３Ｈ美術教育」の基本理念である「Heart（心）」を活性化させる美術教育実践を通し，美術科における「表現･コミュニケーション力」の育成と評価についての取り組みである。以下，「３Ｈ美術教育」の基本理念と本校の目指すべき人間像の育成の手だてを関連させながら，美術科における「表現・コミュニケーション力」の育成と評価のあり方について述べていきたい。

Ⅱ．美術科における「表現・コミュニケーション力」

一般的なコミュニケーションの形態は，表現・伝達の「記号化」として「言語」が念頭におかれるが，美術科においては，形，色，材質感などの「造形表現」によって送り手～受け手という表現･コミュニケーションの形態が成立している。また造形表現では，相手との関係におけるコミュニケーションだけでなく，自分なりに感じたことを表現する過程のなかで同時に自分自身とコミュニケーションを行なっているのである。そのような過程のなかで自分の「個性」を見つけるきっかけを作っていっているのである。そういった造形表現を中心とする美術科では，「表現・コミュニケーション力」を育成するための手だてとして第一に若元の３Ｈ美術教育のHeartの活性化に着目した。これは本校が「表現･コミュニケーション力」を育成するための手だてとして着目した２点の「内的表象を高めさせる」と「相手を意識する」ことに直結するのである。

Ⅲ．３Ｈ美術教育と「表現・コミュニケーション力」

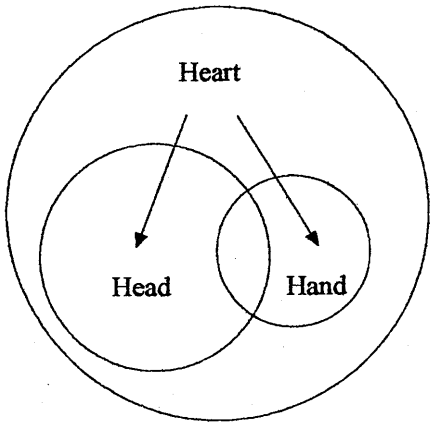


図１　３Ｈの図式化

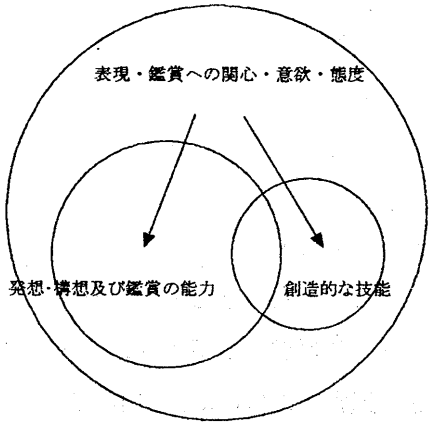


図２　３Ｈと指導要録の「４観点」との対応

３Ｈ美術教育とは，現下，美術教育に関する若元の主張の中核をなすものである。この文脈で展開される美術教育の中でこそ，なおかつ十分には達成されていない「美術による教育」と「美術の教育」の双方が達成されるものと考えている。「３Ｈ」とは，Heart，Head，Hand を指す。図１はこの三者の関係を図式化したものである。Head（頭）と Hand（手）を Heart（心）に内包させたのは，Heart の優先性を示したものであり，Heart から Head 及び Hand に向かう「一方向矢印」は，Heart（感性，感受性，感覚，感情，関心，意欲等）の活性化が，おのずと Head（知性，知恵，知識，発想，構想等）と Hand（技能，技術，技法等）の活性に連動することを想定したものである。これは，自己教育の図式とも整合する。また，３Ｈ美術教育は，指導要録の「４つの評価観点」とも対応している（図２）。指導要録において，「①美術への関心・意欲・態度，②発想や構想の能力，③創造的な技能，④鑑賞の能力」が示されている。この４つの観点を内容的な視点から再構築すると，かなり高いレベルで「３Ｈ」との符合を確認できる。再構築の手順は次の通りである。「①」の冒頭にある「美術」についてはその意味内容と文脈から「表現・鑑賞」という文言に置換できる。否，そうすべきである。すなわち，「関心・意欲・態度」は，「鑑賞」にも欠かせない観点だからである。したがって，第１観点の表記は「表現・鑑賞への関心・意欲・態度」とする。

この第１観点の「関心・意欲・態度」は，とりもなおさず Heart そのものである。第２観点と Head の関係は，若干の無理（現行の指導要録の文言で再構築するため）はありつつも，意味的には「発想や構想」と同質の知的レベルの活動で結ぶということで「鑑賞」の文言を付加して「発想や構想及び鑑賞の能力」とする。第３観点の Hand は，原形のまま「創造的な技能」をスライドできる。さて，指導要録に示されている４観点は，以上の通り３Ｈで括ることができる。（若元澄男）

本校の目指すべき人間像は「自分を見失わずに異なる文化や異なる価値観を受容し，情報を活用しながら他者とのコミュニケーションを積極的に展開でき，よりよい意思決定を目指し行動ようとする人間像」である。その基礎･基本として「多元的価値観を受容する力」「意思決定力」「表現･コミュニケーション力」の３つの力こそが必要であると設定した。この３つの力は，若元の提唱する「３Ｈ美術教育」の Heart，Head，Hand と図３のようにそれぞれが主として対応するのではないかと考える。

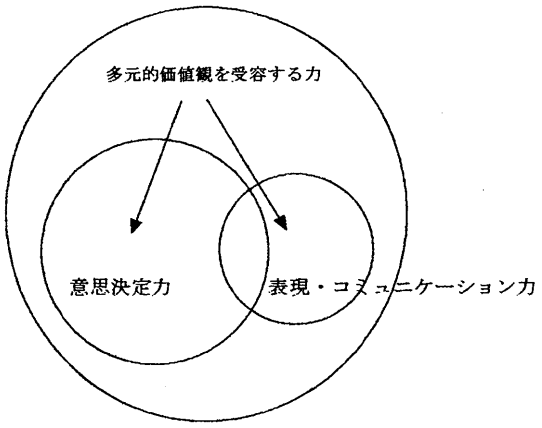


図３　３Ｈと本校の基礎・基本としての３つの力との対応

美術科では，本年度焦点を当てて研究を進めている「表現･コミュニケーション力」は，3Hの「Hand」と，また，指導要録の4観点では「創造的な技能」と対応していくと考えられる。当然ながら美術科における「表現・コミュニケーション力」は上記で述べているように一連の造形表現の過程の中で育成されるもので，3H美術教育のHeartを基盤とする図式の中のHandである。

今回の美術科授業における実践においては，次の2点に留意した。1つは，本校が育成の手だてとして着目した「内的表象を高める」について実物の抽象陶芸作品を鑑賞活動と作品から自分なりにイメージしスケッチする表現活動を媒体に3H美術教育の「心（Herat)」を中心に内面のワクワクドキドキとした心の活性化を高める取り組みを設定した。また「相手を意識する」については，鑑賞活動を通してのコミュニケーションの中からお互いの心の中に表されたイメージを深め合い，相手を意識した表現・鑑賞活動につながることが出来るかどうかを研究意図とし設定した。授業では，実際の作家もゲストティーチャーとして招き，より心の活性化を高める手だてを試みた。

Ⅳ．実践内容と生徒の意識調査

1　題　　材　現代アートと語ろう・作家と語ろう～現代陶芸家を招いて～

2　実施時期　2003年9月～11月

3　学　　年　第1学年1.2組生徒80名

4　指導目標　(1) 現代美術の多様な表現のよさに興味・関心をもたせ，表現・鑑賞活動に親しむことができるようにする。

(2) 作品のよさや美しさをとらえ，様々な表現効果を工夫し，形や色を全体と部分の関係でとらえスケッチすることができるようにする。

(3) 鉛筆，コンテ，ペン，毛筆など作品から感じた印象をもとに表現材料を選んで独自の表現に展開していくことができるようにする。

(4) 作者とのコミュニケーションにより，作者の心情や意図と表現の工夫を感じ取り，作品の見方を広げ，多様な表現のよさや美しさを知り，鑑賞に親しむことができるようにする。

5　指導計画　(1) オリエンテーション・作品と語る …… 1時間

(2) 現代作品のよさや美しさをとらえたスケッチ …… 5時間

(3) 現代陶芸家と語る …… 1時間

(4) 学習のまとめと評価 …… 1時間

6　意識調査　本題材の授業前後の生徒の学習活動に関する意識の変化をはかるための調査をアンケート形式で行なった。学習活動は，大きく「作品を見たとき」「スケッチをしたとき」「作家と出会ったとき」の3つの状況に分け，「3H美術教育」「表現・コミュニケーション力(内的表象)(他者を意識する)」「指導要録の4観点」との関連をはかり項目を設定した。

調査時期：2003年9月・11月

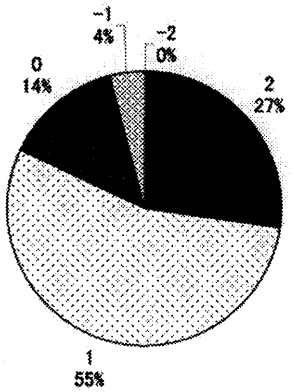
調査項目：「ワクワクドキドキ度」は，(＋2・＋1・0・－1・－2)「自分流チェック」については（と

てもよくできた・できた・ふつう・できなかった・まったくできなかった）のそれぞれ５段階による自己評定尺度とその他自由記述で構成した。

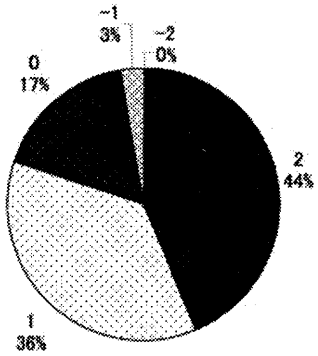
Ⅴ．調査結果

１　ワクワクドキドキ度

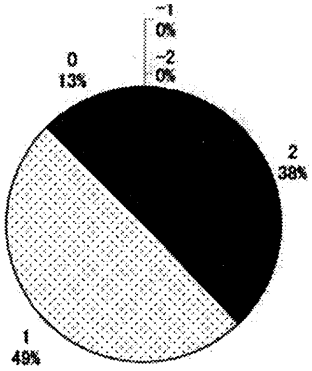
ワクワクドキドキ度とは，若元の「３Ｈ美術教育」の理念の心（Heart）が活性化しているかどうかをはかる手だてとしたものである。関心の度合いや心の高まりなどの状態を＋と－の５段階で尋ねたものである。図４は，最初に現代抽象陶芸作品を見たときと（図５），スケッチをしたとき（図６）と，作家と出会ったときのワクワクドキドキ度を示したものである。



現代陶芸作品を見たとき



自分流のスケッチをしているとき



作家と出会ったとき

図４　ワクワクドキドキ度集計結果

今回の授業は，全体を通してワクワクドキドキ度からみても生徒のHeart(心）の＋２，＋１の状態の数値は高い結果がみられる。特に－２がいずれも状況においても見られていないのは，題材や内容に対して，高い関心が持続していることが考えられる。しかし，「作品を見たとき」「スケッチをしているとき」「作家と出会ったとき」のそれぞれの状況には，わずかなHeart（心）の高まりに差があり，最も高い＋２は「スケッチをしているとき」の状況が高く，全体的なHeart（心）の高まりは，「作家と出会ったとき」の状況が最も高くなっている。

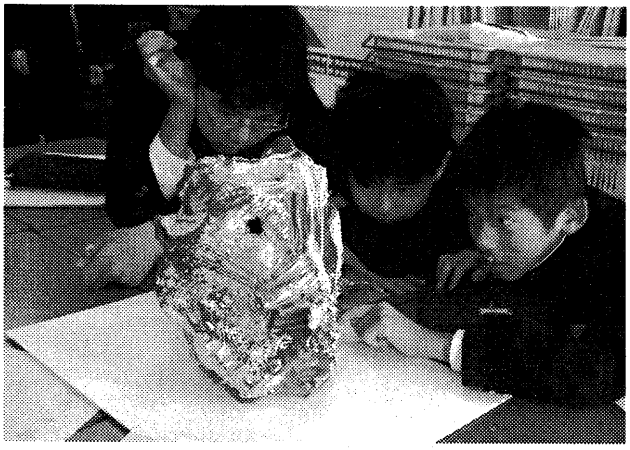
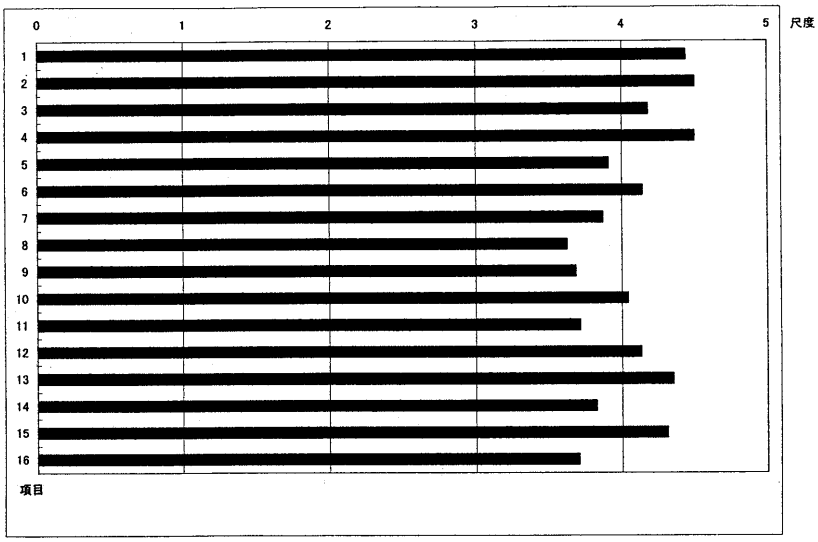


図５　現代陶芸作品を見ている様子

図６　スケッチをしている様子

2　自分流チェック

自分流チェックとは，心（Heart）から発想・構想（Head）や創造的な技能（Hand）にどう関わっていったのかをはかる手だてとしたもので，自己評価の形式で自分の到達度を「できるようになった」～「できなくなった」の５段階で尋ねたものである。ワクワクドキドキ度と同様に「３Ｈ美術教育」「表現・コミュニケーション力（内的表象）（他者を意識する）」「指導要録の４観点」との関連をはかり項目を設定した。図７はその数値をあらわしたものである。図７の１～６は主にHeart~Head（内的表象）に関する項目，７～10は主にHandに関する項目，11～15は主に鑑賞の能力（他者を意識する）に関する項目，16は表現・コミュニケーション活動全体に関する項目としてそれぞれ設定して，それぞれの生徒の到達度を図った。取り組みに関しては，項目の１～４に見られるように心の活性化の度合いに対応して到達度の数値が高くなっている。また，項目６，10や12，13から「内的表象」や「相手を意識する」到達度も高い数値が見られる。しかしながら，項目８，９，11のようにより細かな表現や鑑賞の技能に関してや項目16の表現・コミュニケーション全体に関わることのふり返りに対しては，十分な到達度の高まりを示すことができていない結果が見られた。



５：とてもよくできた

４：できた

３：ふつう

２：できなかった

１：まったくできなかった

（数値は，平均値）

１．楽しく鑑賞することができましたか	４．４５
２．楽しくスケッチに取り組むことができましたか	４．５０
３．集中して鑑賞することができましたか	４．１９
４．集中してスケッチに取り組むことができましたか	４．５０
５．陶芸作品のよさや美しさを感じることができましたか	３．９１
６．陶芸作品から色々なイメージを発想することができましたか	４．１４
７．自分の表現材料を選んでスケッチすることができましたか	３．８７
８．スケッチのとき色々な表現を工夫することができましたか	３．６２
９．全体や部分を画面を考えてスケッチすることができましたか	３．６８
10．自分の感じたことをスケッチすることができましたか	４．０４
11．作家の作品への思いを感じ取ることができましたか	３．７１
12．作家の色々な表現の工夫を感じ取ることができましたか	４．１４
13．友達の色々なスケッチのよさに気づくことができましたか	４．３５
14．作家と出会った後、作品の新しい見方を知ることができましたか	３．８２
15．作品を鑑賞する楽しさを感じるようになりましたか	４．３１
16．コミュニケーションを通して自分の感じたことを表現できましたか	３．７０

図７　自分流チェック集計結果

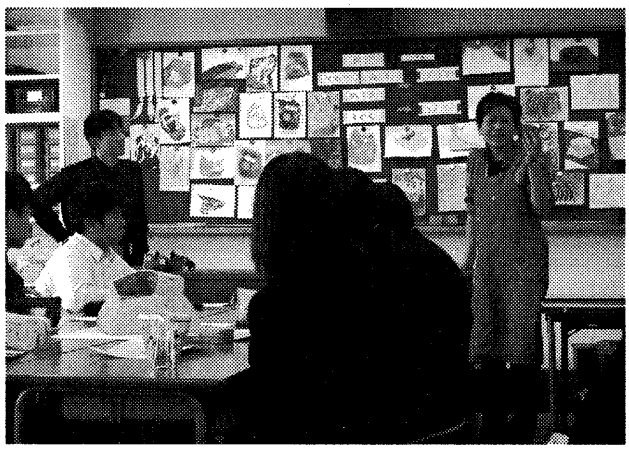


図８　作家とのコミュニケーションの様子

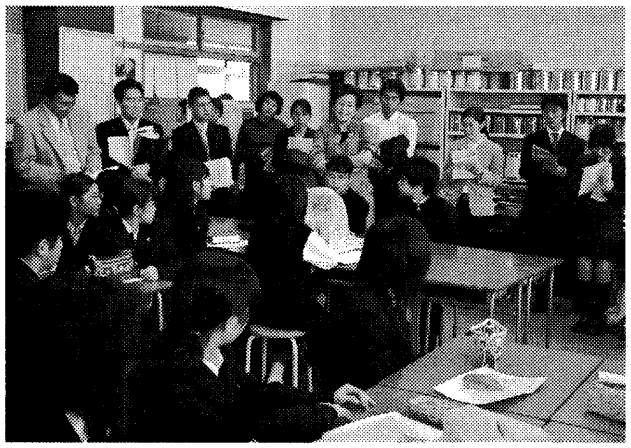


図９　作家とのコミュニケーションの様子

現代陶芸家と作品語り合う

広大付属東雲中生

国際的に活躍している現代陶芸家の伊藤五恵さん(四七)＝宮崎市＝が二十一日、南区の広島大付属東雲中を訪れ、一年生の美術の授業で、作品に込めた思いを生徒と語り合った。作家の創作意図を直接話してもらおうと、美術の三桝正典教諭(四三)が招いた。

伊藤さんは、山や家をイメージした緑や茶色の五つのオブジェについて「戦いなど悲惨なことが多い時代に、安心して暮らせる温かい家庭が少しでも増えるように願いを込めて作った」などと説明。生徒は「古い帽子に見えた」「野菜畑だと思った」など、オブジェから受けた印象を一人ずつ発表した。

坂勇紀さん(一三)は「失敗したら壊して納得するまで作るというところがすごいと思った」と感心していた。

生徒にオブジェの説明をする伊藤さん(中央)

図１０　新聞記事　中国新聞　2003.11.22

３　自己評価板を使った評価活動

自己評価板を使った評価活動は，毎時間授業終了後，美術教室の出入り口に「自己評価板」を設置し，各自で本時の自分の授業の取り組み（興味・関心・態度）の自己評価を公開の形式で付けていく。各生徒は自己評価板にあらかじめ付いている出席番号の磁石から自分の番号を取り，その磁石を自己評価板に示された５段階の評価基準（とてもよくできた・よくできた・ふつう・できなかった・全くできなかった）に照らし，その区分された場所に自分が判断し，磁石を付ける方法である。教師は，全員が磁石を付け終わったらその付けた状況をメモして確認をする。自己評価板の評価活動を通して課題であると判断した場合は，その状況に応じて個々の生徒に休憩時間や放課後の時間を使ってインタビューなどの方法を通してその理由を確認し，次時までには克服できるように指導・支援を行う。

図 11 は各授業ごとの自己評価板の結果である。

自己評価板の評価基準	とてもよくできた	よくできた	ふつう	できなかった	全くできなかった
最初の授業（現代陶芸作品を見たとき）	32	5	2	1	0
スケッチを始めたとき	36	2	2	0	0
スケッチを終えたとき（直前の授業）	37	2	1	0	0
ゲスト Teacher を招いた授業（当日）	39	0	1	0	0

図 11　授業後の自己評価板結果（１年１組）

4　自由記述

作家とのコミュニケーションの授業後，生徒個々に感じた事柄を文章で自由記述させた。

下記のものは，その中から顕著に変化したと思われるものを選んだ。

- 作家と見る人では，見て思うことが違って，考えも変わったりして，作者と直接話して新しい発見ができて良かった。
- 作品を見て，はじめは何だろうと思った。わざと何かわからないように作っているんじゃないかとも思ったが，話を聞いて作者なりに色々な思いがあるんだなと感じた。
- 授業の中で感じたことは，やっぱり一人ひとりの考え方が違うことです。実際私が作者の作品について思ったイメージと作者が作品に込めた思いとは違ったことからそう思いました。
- 僕はあまり陶芸に触れたことがなかったが，作品や作者に出会って，色々イメージすることができ，ちょっと興味をもつことができました。イメージすることがみんなばらばらでみんなとても素晴らしいと思いました。
- 作者はすごく想像力が豊かでものすごく作品の表現が伝わってきました。家族への思いや自分の気持ちが私の心にすごく響きました。
- 僕は，作者が自分の思うままに作品を作っていることに驚きました。実際に作品を見て，作者は何をイメージして作っているんだろう，発想はどこから沸いてくるんだろうと疑問に思ったけど，　授業を終えて自分の発想力がすごい成長したように思いました。
- 一目見ただけでは何なのかまったくわからないような作品が多く，最初はどの作品を描こうか迷いました。でもどの作品を選んでも後悔はしなかったと思います。それは，どの作品を見ても何か訴えるものがあって色々なものに見えるからです。
- 作者とは授業の間しか関われなかったけど，何か作者のことがわかった気がしました。
- いろんな美術があるんだなぁ～と思った。作者の作品を描いてとても楽しかったです。
- 作品を作ったときの話を聞いて，一つの作品には私が考えた以上にたくさんの思いが込められていることがわかりました。私も美術の授業などで作品を作ったり描いたりするとき，そういうことができるようになりたいです。
- 授業の前は，作品をみても作者のことは考えてなかったけど，授業を終えて作者を意識するようになりました。
- 作品に出会う前より色々な想像をイメージするようになりました。作者のイメージみんなのイメージを聞き，自分もさらにイメージを広げることができ「こうかも！」「こういうイメージも納　得できるかな」など思いました。みんなの受け止め方はそれぞれ違うけど，それによって色々な　想像が出来ました。
- 作品を直接見ることができてとても嬉しかったです。一度でいいから何か作品を作っているところを最初から最後まで見てみたいなと思いました。

Ⅵ. 考察とまとめ

若元の「３Ｈ美術教育」の基本理念のもと現代抽象陶芸作品や作家との関わりを通して，その表現や鑑賞活動が，心（Heart）を活性化させ，またそれがHeadやHandに作用していき，生徒一人ひとりの「表現・コミュニケーション力」を高めていくことにつながっていったのかどうか，その有効性をはかる取り組みを行なった。「表現・コミュニケーション力」の育成をはかる手だてのとして本校が設定した「内的表象

を高めさせること」と「相手を意識させること」は,「作品を見たとき」「スケッチをしたとき」「作家と出会ったとき」それぞれの学習過程のワクワクドキドキ度や自分流チェックのHeartやHeadに関するの項目や鑑賞活動に関する項目の到達度の高まり，さらには自己評価板での自己評価の高まりをみても，２つの手だてに関して高めることができたのではないかと思う。また，自由記述の文中の「話を聞いて作者なりに色々な思いがあるんだなと感じた」「イメージすることがみんなバラバラでとても素晴らしいと思った」「みんなの受け止め方はそれぞれ違うけど，それによって色々な想像ができました」から見ても，同様に高めることができたのではないかと思える。また，若元の３Ｈと対応する「表現･コミュニケーション力」のHandに関する自分流チェックの10の項目「自分の感じたことをスケッチすることができましたか」などの到達度の結果からみても一定の「表現・コミュニケーション力」の育成をはかることができたのではないかと思える。このことは,「３Ｈ美術教育」の理念のもと心(Hear)を活性化させる表現・鑑賞活動が「内的表象」と「相手を意識させる」ことを高めさせ，それによって「表現コミュニケーション力」を育成させることにつながったのではないかと考える。しかしながら，より細かな技能の習得を必要とする表現や鑑賞活動への到達度は，他の到達度と比較するとあまり高まっていない状況である。また，学習全体をふり返る「コミュニケーションを通して自分の感じたことを表現できましたか」の項目に関しても同様に,他の到達度と比較すると高まっていない結果が見られる。このことは,「内的表象を高めさせる」「相手を意識させる」ことはできても，より細かな技能的な技術が十分に習得できていないことによって確かな「表現・コミュニケーション力」を身につけさせることができなかったと考えられる。また,「内的表象を高める」や「相手を意識させる」手だてだけでなく，本校が「めざすべき人間像」の基本として考えた「多元的価値観を受容する力」や「意思決定力」との関わりも視野に入れた「表現・コミュニケーション力」の育成のあり方も検討すべきではないかと考える。今後は,「表現･コミュニケーション力」と「多元的価値観の受容」「意思決定力」のつながりを「３Ｈ美術教育」との関連性のなかで整理していき，より確かな「表現・コミュニケーション力」を育成していく有効な手だてとそれを支える評価のあり方を模索していき，めざすべき人間像の育成に迫っていきたいと思う。

引用・参考文献

黒瀬基郎ほか.「明日を担う生徒を育てる学校教育の創造（4)」. 広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』. 第36集. 2004

三桝正典・若元澄男.「３Ｈ美術教育における評価のあり方」. 広島大学附属東雲中学校研究紀要『中学教育』. 第35集. 2003. pp. 69 ～ 79.